

多言語社会における日・朝・中三言語使用の有効性と限界：中国朝鮮族の日本語教育を事例に

永嶋, 洋一

<https://doi.org/10.15017/1654601>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（比較社会文化）, 課程博士
バージョン：
権利関係：全文ファイル公表済

氏 名 : 永嶋洋一

論 文 名 : 多言語社会における日・朝・中三言語使用の有効性と限界
—中国朝鮮族の日本語教育を事例に—

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、中国朝鮮族の日本語、朝鮮語、中国語という三言語使用による日本語教育方法、及び学習方法を明らかにするものである。

グローバル化の進行が著しい現在、日本語教育においても、学習者一人一人の特性に合った教育のあり方が問われている。朝鮮語、中国語という多言語社会で暮らし、日・朝・中という三言語を使用して学び、教えている現在の中国朝鮮族の日本語教育は、多様な言語能力を持つ学習者、特に中国語を学んでいる朝鮮語（韓国語）母語話者、及び朝鮮語（韓国語）を学んでいる中国語母語話者に対する日本語教育のひとつのモデルとなり得るものである。

これまでの研究は朝鮮族の日本語教育について政治的、歴史的観点から分析し、考察しているものが多く、言語教育学的観点から実証的に研究しているものは少ない。さらに、朝鮮族の三言語使用の実態に注目し、その教育方法と学習方法について論じているものは皆無に等しい。ここに研究の余地があると言える。本研究の意義は、日本語、そして日本語との共通点が見られる朝鮮語、及び中国語という東アジア三言語使用による朝鮮族の日本語教育の教育方法と学習方法を明らかにすることで、中国語を学んでいる朝鮮語（韓国語）母語話者、及び朝鮮語（韓国語）を学んでいる中国語母語話者に対して有効な日本語教育方法、及び日本語学習方法を提示できる点であると考えられる。研究方法としては、先行研究を参照しながら、インタビュー調査、アンケート調査、及び授業見学を実施し、その調査結果をもとに分析し、考察を加えた。

本論では、大きく3つの研究課題を挙げる。①現在、朝鮮族学校で行われている三言語使用による日本語教育方法は、単一言語使用、及び二言語使用による日本語教育方法とどのような違いがあるのか。②朝鮮族教師は日本語を教える際、どのように三言語を使い分けているのか。③朝鮮族学習者は日本語を学習する際、三言語をどのように使い分けているのか。以上3つの研究課題について言語教育学的観点から明らかにする。

本論は大きく6つの章で構成されている。第1章では序論として、まず研究背景を述べ、用語の定義及び表記、研究目的を示した。さらに、先行研究について概観し、その問題点を指摘した上で、研究課題を提示し、研究方法、本論の構成を紹介した。

第2章は、課題①について、朝鮮族教師の教育方法、特に言語使用に注目しながら、時代ごとに比較、検討した。「満洲国」期の「朝鮮族」教師の教育方法は、日本語及び朝鮮語の二言語使用による折衷法であり、徹底した「母語排除」の結果、学校外においても「朝鮮族」の子どもたちの日本語学習及び日本語使用が見られた。また、改革開放期以降は「満洲国」期に日本語教育を受けた「老一代」教師による日本語教育が行われた。それは「満洲国」期の教育方法の影響を受けた暗唱型教育であり、教授用語としては主に朝鮮語が使われた。2000年代になると、「漢語化」の影響で、朝鮮族の言語能力に変化が生じたため、教授用語として中国語が使われるようになり、現在は日・朝・

中の三言語使用による日本語教育が行われていることがわかった。中国語が使われるようになったことで、日本語と朝鮮語では理解することが難しかった文法表現についても中国語で理解することが可能となり、さらに朝鮮語だけでなく、中国語でも解釈することで、より理解が深まっていることが明らかになった。

第3章では、課題②の朝鮮族教師の三言語使用による教育方法について、学校別、教師別に明らかにした。教師が授業で使用する言語は、日本語の文法については共通点の多い朝鮮語を使用するものの、朝鮮語では説明しづらい文法表現については中国語で説明し、さらに朝鮮語、中国語でも説明が難しいものについては、日本語の例文を多く出し、理解させていることがわかった。つまり、単一言語だけでは解釈が難しい文法表現については、他の言語を使用することによって解釈し、理解させる「補完的理解」を促す教育方法が見られた。さらに、ひとつの日本語の単語や文法表現についても、三言語で解釈し説明することで、より理解を深めさせる「相乗的理解」を促す教育方法も見られた。その一方で、教師の中国語能力が十分でないため、中国語の使用が限定されている事例も見られた。

第4章では、課題③について、朝鮮族学習者の言語能力に注目しながら、三言語使用による日本語学習方法を学校別、学習者別に明らかにした。学習者はたとえ朝鮮語より中国語が得意であっても、すべての文法を中国語で理解するのではなく、ある文法表現については朝鮮語で解釈し、理解していることがわかった。また、教師が日本語と朝鮮語で文法解釈を行っているにもかかわらず、学習者自身は日本語の文法表現に合わせて朝鮮語と中国語を使い分けている事例も見られた。これは朝鮮族の言語理解の多様さを示している。また、三言語使用によって「相乗的理解」と「補完的理解」が可能になることから、多くの学習者が教師の三言語による教育方法を望んでいることが明らかになった。その一方で、学習者の朝鮮語能力が十分でないため、朝鮮語使用による日本語理解ができない事例も見られた。

第5章では、これからの朝鮮族の日本語教育を展望した。英語教育の影響や朝鮮族学生の減少により日本語教育が途絶えた朝鮮族学校がある一方で、一度日本語教育がなくなったことで、改めて日本語の優位性を認識し、再開する学校も出てきていることがわかった。また「第二外国語としての日本語教育」も注目されていることから、今後は日本語教育が「消滅」する学校、日本語教育を「再開」する学校、そして日本語教育を新たに「開始」する学校が出てくると考えられる。

最後に第6章では、中国朝鮮族の三言語使用による日本語教育についてまとめ、東アジアにおける三言語使用の有効性と限界について考察し、結論とした。